

# 院長の独り言...vol. 1

毎年元旦に行われる新年の祈禱に参加している。今年そこで聞いた講話について紹介しておきたい。

お寺の本堂に書の掛け軸が掛けてあった。清水寺の森清範(せいはん)貫主(かんす)の書だということだった。森清範という名前に聴き覚えはないだろうか。毎年、「今年の漢字」を清水寺の舞台上で揮毫している方であるといえればお分かりになるだろうか。

話はその森清範氏のことであった。森氏は花園大学の卒業生で、わが菩提寺の住職の先輩にあたるのだという。花園大学は禅宗の大学であるが、森氏の清水



寺は、奈良の興福寺が大本山である法相宗から分かれた北法相宗のお寺である。禅宗の大学であるがゆえに花園大学に入っても法相宗のことは何も学ぶことができないといってもよいだろう。ではなぜ花園大学を選んだのか。森氏はこう考えたのだそうだ。「法相宗のことは将来嫌でも多くを学ぶ機会があるが、若いうちは他の宗派のことを勉強しておきたい。将来法相宗の中にどっぷりと浸かった時になって、きっとその体験が何かの役に立つだろう」と。少しぐらい回り道をして、若いうちにいろいろなものに出逢っておくことの方が大切なのだということらしい。

そこで話は小泉信三氏のことに移る。小泉氏は1933-46年の間、慶應義塾の塾長を務め、さらに1949年には東宮御教育常時参与に就任し、当時の皇太子…現在の<sup>上皇</sup>…である昭仁殿下の教育掛を務めた人物である。数々の名言を残しているが、ここで取り上げられたのは「すぐ役に立つことは、すぐに役に立たなくなる」であった。ここで話は森清範氏につながるのである。森氏は手っ取り早く法相宗の勉強をすることよりも、将来の自分にとって糧となるかもしれない禅宗の世界に身を投ずることを選んだのだった。

我々はややもすれば目先の利益にばかりこだわってしまいがちであるが、本当は将来役に立つものに少し目を向けていく余裕を身につけてもよいのではないだろうか。そんな想いを胸に寺を後にした。

2020.02.20 初掲載